

新 日 鉄

NIPPON
STEEL
MONTHLY

1・2

2011
JANUARY &
FEBRUARY
VOL.205

新年のご挨拶

強い競争力の実現に、全力で取り組んでまいります

◎ 新日本製鉄(株) 代表取締役社長 宗岡 正二



新春会長対談

これからも輝きつづける日本であってほしい

◎ 作家 水村 美苗氏
◎ 新日本製鉄(株) 代表取締役会長 三村 明夫



強い競争力の実現に、 全力で取り組んでまいります

新日本製鉄(株) 代表取締役社長

宗岡 正二

あけましておめでとうございます。年頭に当たり、一言ご挨拶を申し上げます。

厳しい経営環境

緩やかな回復を続けてきた日本経済は、景気刺激策の終了や急激な円高等の影響で、昨年夏以降急速に鈍化し、足踏み状態が続いています。国内の鉄鋼需要も、土木・建築部門の低迷、主要製造業ユーザーの海外生産移転など、かつての8000万トンレベルへと回復することは当面想定しづらい状況です。一方世界の鉄鋼需要は引き続き拡大が見込まれますが、円高による輸出競争力低下により、海外市場での競争は厳しさを増しています。

供給面では、海外新鋭製鉄所が次々と立ち上がり、円高による日本向け輸出競争力の向上もあり、ミドルグレードを中心とした大競争は激しさを増しています。さらに資源インフレは当面続く見込みで、高生産下でも利益を確保しにくい厳しい環境に置かれています。

製鉄事業の課題

このような環境下で私たちは、次の三つの課題に全力で取り組んでまいります。

第一は「国内製鉄事業基盤の強化」です。まず

災害やトラブルのない、お客様に評価される製品を安定的に供給できる、強い現場力を持った製造現場を目指します。安全については、今後ソフト・ハード両面から、直協一体で災害ゼロの実現を進めます。また操業・整備部門が協力して、トラブルのない安定操業に全力を尽くします。さらに強い現場力の根幹である、6S活動や製造基盤整備活動にも、地道に取り組んでいきます。そのうえで、設備を使いこなし、品質や効率を極限まで高め

ていきます。JK活動など各所のベストプラクティスの横展開や他社動向への感度も高め、安定操業と効率向上に挑戦します。また製鉄所・事業部の枠を超えて、全社ベストの最適生産体制構築に取り組んでいきます。

またイノベーションの創出によって、お客様に期待される商品開発を進めます。そのため、営業・製造部門と一体となって、お客様と連携しながら、研究開発を深めていきます。エネルギー・環境・インフラ等の成長分野に加えて、資源高騰・劣質化対応の原料技術、地球温暖化への対応等、直面する課題を技術で解決していきます。

さらに、お客様の海外展開等の需要構造の変化と、国内外における競争の激化という厳しい環境にある今こそ、お客様のニーズにあった製品をタイムリーにお届けするという営業活動を、製造現場と連携して深化させます。また海外を中心に、エネルギーや環境向け等の当社が得意とする高機能製品などの成長分野で、新商品の開発・提案を進めていきます。

変動コストの大部分を占めるようになった原燃料については、競争力ある価格レベルでの安定調達に全力で取り組みます。タイトな需給状況が継続する環境下で、権益確保を含む新規ソースの開拓、新資源利用技術への取り組み等を進めていきます。

第二は「グローバル生産・供給体制の構築」です。

既に稼働している海外プロジェクトについては、安定的な収益基盤の確立と、需要動向に応じた将来計画の策定・実行を進めていきます。また新規案件として、メキシコ・インドでの自動車用鋼板・鋼管事業、ベトナム・アフリカでの建材・インフラ分野での事業等に取り組んでいます。お客様にいち早く製品を供給できるよう円滑な立ち上げを図っていきます。さらに新しい地域や製品分野でも、最適な形で供給できる生産体制を他社に先駆けて整備してまいります。

当社の高い技術力と海外での事業経験をもとに、中期計画で掲げた日本・アジア・環大西洋圏の世界3極体制の構築に全力で取り組んでいきます。

第三は「業務基盤の強化」です。

まず、製造実力向上活動と両輪で取り組んでいる経営ソフト改革を着実に推進していきます。現場の考えや決定がスピーディーに実行されるように、今後も、業務マネージャー／意識・風土、基幹業務ルール、組織・意思決定システム、直協マネジメント、人材配置・育成の5つの分野で、具体的な施策を進めていきます。特に、人材育成と技能伝承は喫緊の課題であり、継続的に取り組んでいきます。また製造現場のパートナーである協力会社の皆さんとは、課題解決のため、率直に意見を言い合える関係を強化してまいります。

また社会から信頼される会社となるため、環境規制を守ることでできる仕事の仕方を、現場実態を踏まえて再構築していきます。地球温暖化問題については、エコプロセス・エコプロダクツ・エコソリューションの3つのエコで、技術力による問題解決に努力していきます。

さらにコンプライアンスについては、「社会と共生し、社会から信頼されるグループであり続けます」という経営理念に立ち返り、一人ひとりがルールをきちんと守る仕組みづくりとチェック体制の構築に、万全を期してまいります。

製鉄以外の事業セグメントの課題

自律的な事業運営によってプレゼンス向上を図るとともに、各社の技術力等の強みを共有・結集させシナジー効果を発揮し、総合力ナンバーワン企業としてグループ全体の競争力を高めていきます。

エンジニアリング事業では、国内案件の捕捉とともに、成長が見込まれる新興国等でのインフラ投資案件などへの取り組みを強化していきます。

都市開発事業では、事業リスク管理の徹底と、マーケットニーズを捉えた、自社の特色を活かせる案件の実行を進めていきます。

化学事業では、製鉄化学事業と機能材料事業を中核に、事業の効率性の追求を通じて、競争基盤強化と成長分野への取り組みを推進します。

新素材事業では、中核の電子産業分野、および環境・エネルギー等成長分野での、競争力強化・事業拡大と安定的な事業基盤の構築を進めます。

システムソリューション事業では、お客様対応力の強化とコスト競争力強化により、顧客基盤拡充と新事業領域の拡大に取り組めます。

終わりに

いかなる事業環境にあっても、私たちはもの造り企業としての原点を磨き、当社が目標とする世界3極体制の構築と、5000～6000万トンの生産能力を有する世界最強の鉄鋼メーカーに向け、以上の課題に取り組んでまいります。グループの総合力を遺憾なく発揮し、鉄事業を中核として社会に貢献し続けられるように、全員一丸となり全力を尽くす一年としたいと思います。

この一年が、皆様にとって健康で明るい年となりますよう祈念し、年始のご挨拶といたします。

作家
水村 美苗 氏

新日本製鉄(株) 代表取締役会長
三村 明夫



みずむら・みなえ／東京生まれ。12歳で家族と共に渡米。当初アメリカに馴染めず、改造社版『現代日本文学全集』（全63巻）を読んで少女時代を過ごす。イエール大学を卒業し（仏文専攻）、同大学院博士課程修了後に帰国。のちに創作の傍ら、プリンストン大学などで日本近代文学を教える。著書に、『續明暗』（1990年、芸術選奨文部大臣新人賞）、『私小説 from left to right』（95年、野間文芸新人賞）、『本格小説』（2002年、読売文学賞）、『日本語が亡びるとき—英語の世紀の中で』（08年、小林秀雄賞）、『日本語で書くということ』『日本語で読むということ』（共に09年）などがある。

これからも輝きつづける 日本であつてほしい

夏目漱石の未完に終わった小説『明暗』の結末を描いた『續明暗』をはじめ、日本近代文学を生んだ高質で芳醇な日本語による小説や評論を発表し続けている、作家の水村美苗氏。2008年に発刊された話題作『日本語が亡びるとき』では、英語が普遍語としてその地位を占めるグローバル時代において、日本語の将来に対する強い危機感を訴えている。今年の新春会長対談では、20年を超える海外生活を経験され、英語やフランス語にも堪能な水村氏をお招きし、言語・文化・教育・経済などさまざまな視点から、現在の日本を取り巻く危機と今後の進むべき道についてお話を伺った。

英語が広がる時代の中で次第に大きくなった日本語が亡びる危機感

三村 作家デビュー作となった『續明暗』をはじめ、いくつもの水村さんの著書を拝読しました。『本格小説』では物語小説の醍醐味を堪能しましたが、各界から大きな反響のあった『日本語が亡びるとき』は、一度読んだだけではなかなかすべてを理解できない、奥深い内容でした。その意味で今日の対談は、私自身の知的好奇心を満足させる絶好の機会だと考えています。まず、日本語が亡びるときと命名した危機感はどこから出てきたのでしょうか。

水村 「亡びる」という言葉自体は夏目漱石の『三四郎』から

の引用(※1)ですが、危機感は昔から少しずつ膨らんでいきました。12歳で家族と渡米したあとは、日本が恋しくて、家で昭和元年に出版された『現代日本文学全集』を読んで育ち、大学に入学したときにボストンに行きました。そのとき、ハーバードなどにいる、いわゆる秀才の日本人大学院生たちの書く手紙などの語彙の乏しき、稚拙さを見て、唖然としました。日本語の作家になると帰国してからも、今日日本で使われている日本語と、近代日本文学を通じて自分が慣れ親しんでいた日本語のレベルの格差を感じ続けました。そこへ、インターネットも登場し、英語がいよいよ重要になる。このままでは日本語が話し言葉としては残っても、日本人の精神世界や情緒を豊かに表現する書き言葉としての輝きを失っていくのではないかとという危機感はいよいよ大きくなりました。

インターネットが普及し英語が普遍語としての地位を確実にした『英語の世紀』にあつて、「日本語」の亡びる危機や読み継ぐことの意味などについて、さまざまな角度から問題を提起した話題作。日本語が国語として成立した背景や日本近代文学誕生の歴史、英語の世紀に生きる日本人のための日本語・英語教育のあり方などを、これまでにない斬新な切り口で伝えている。

(※1)『日本語が亡びるとき』英語の世紀の中で(筑摩書房、2008年)



(※1)『三四郎』の中に出てくる広田先生が、日露戦争の勝利に酔う当時の日本人を戒め、「日本はやがて亡びるね」と言った言葉からの引用。

三村 米国で学び生活するという環境の中で、なぜ英語の作家を目指そうとされなかったのですか。

水村 一つは無知だったからです。財閥の子弟ならいざ知らず、普通のサラリーマンの家庭でしたので、世界的鳥瞰図を持っておらず、英語の優位性を理解していなかったのですね。二つには、日本には全集を組めるほどの近代文学がすでに存在していたからです。日本は非西洋国でありながら、国民文学の聖典(canon)を持つ珍しい国なんです。当時は、中国にも韓国にもインドにも、日本のような確固たる近代文学はありませんでした。そうした事実が「呪い」のように私を縛って(笑)。

その後、英語が世界に広がるグローバル時代の中で、もし英語で書いていたらと考えるうちに、日本語で書くことの意味や、さらには日本語とは何か、それはどう成立したのかなど、日本文学の歴史性を常に意識して執筆するようになりました。

国語として成立した「日本語」、 花開いた「日本近代文学」

三村 水村さんは『日本語が亡びるとき』の中で、世の中の言葉、日常語である「現地語」、中世のラテン語や近代の英語のように「書き言葉」として人類の叡智を広く蓄積し伝えるための「普遍語」、そしてその翻訳を通して現地語が普遍語と同じレベルで機能するようになった「国語」の3つの概念に定義されています。そしてさらに、日本で国語が生まれた3つの条件を挙げられています。

水村 4世紀に「普遍語」である漢文が中国から伝来し、漢文圏の一部となった日本では、漢文を日本語に翻訳するうちに、漢文訓読や万葉仮名、カタカナ・ひらがなを生み、「現地語」でも読み書きできるようになりました。その後の成熟期を経て、「現地語」だった日本語が、明治維新後、「普遍語」である西



高校卒業後間もないころ、ニューヨーク郊外の自宅の前で



プリンストン大学講師時代に授業を行った
プリンストン大学東アジア学部の外観

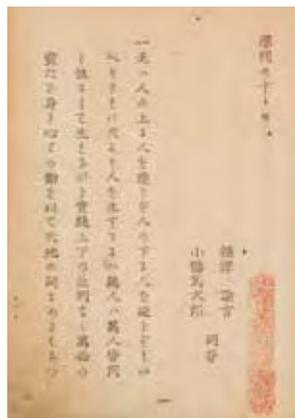


ミシガン大学客員助教授時代。
大学院での日本近代文学の授業風景。写真中央が水村氏



山辺学校歴史民俗資料館所蔵

江戸時代、庶民の子弟に読み書き算術を教える場として、寺子屋が大きな役割を果たした



慶應義塾図書館所蔵

福沢諭吉著『学問のすすめ』。計17編から構成され、写真はその初編(初編のみ小幡篤次郎との共著、洋紙両面活版刷)。「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云へり」の一節は有名。



横浜開港資料館所蔵

洋語の翻訳を通じて、学問さえできる「国語」として成立した。そのおかげで「日本近代文学」が誕生しました。日本語が国語として成立した背景には、漢文圏にありながら中国とは海を隔て、日本の現地語が「書き言葉」として成熟できたこと、江戸時代に資本主義が発達し、藩校から寺子屋まで世界第二位の高い識字率に至る教育が広く普及すると同時に書物が流通し、「印刷資本主義」が栄えていたこと、そして西欧列強の植民地にならなかったことの三つの条件があると思います。

三村 今のお話の中で、印刷資本主義のようなマーケットメカニズムが存在していたことが大きいという説は、ビジネスマンの感覚としてよく理解できます。明治5年に出版された福沢諭吉の『学問のすすめ』は最終的に300万部売れたとお書きになられていますが、当時の日本の人口が約3600万人ですので、仮に1200万世帯と換算すると、実に約30%の家庭があの本を購入していた計算になります。これは驚きですね。

水村 当時の識字率を考えると、読める人たちのほとんどが買ったということでしょうか。当時、書物は難しいものという大前提があったのですが、学問の言葉である漢語ではなく誰にもわかる和語（漢字、ひらがな、カタカナ）で書かれたことが大きかったと思います。

三村 そうして日本で国語が生まれて定着し、国語で書かれた近代文学が明治期に発達していったということですね。また『日本語が亡びるとき』は、私がこれまで知らなかったいくつかの貴重な事実を教えてくださいました。例えば、福沢諭吉が西洋の蓄積された叡智を求めて高価な物理書を塾生と回し読みしながら、寝食を忘れて懸命に学んだオランダ語が横浜でまったく通じず、大きな衝撃を受けながらも当時普通語になりつつあった英語を再度一から勉強し始めたということ。その努力はすごいですね。日本を近代国家にしなければならぬという強烈な使命感があったのでしょね。

水村 その使命感が、英語という、新たに登場した普通語に

蓄積された知識や技術や叡智を、いち早く翻訳することを要求しました。彼にはまだ十分若さがありましたし。私自身、戦後教育の中で「富国強兵」は悪いものだと思われて育ちましたが、日本語について考えるうちに、日本が富国強兵しなければ西欧列強の植民地となった、あるいは分割されたことを思い、日本近代史の解釈が変わってきました。福沢諭吉のような「叡智を求め人」の翻訳によって、日本語はその言葉で世界と同時に思考できる「国語」へと変貌を遂げ、日本近代文学の誕生と成熟をも促すことになりました。

三村 夏目漱石もこの時代に活躍しましたね。

水村 漱石はお雇い外国人講師であるラフカディオ・ハーン（※2）の後任として、東京帝国大学文科で英文学の先生となりました。当時の日本の大学は、まさに翻訳者養成所として、西洋語を読み日本語で書く知識人を育成していたのです。その後、漱石をはじめとする数多くの東京帝大出身者が、西洋語の翻訳だけでは飽き足らずに大学を飛び出し、在野で書く小説家となり、近代文学の数々の名作を生み出してきました。

三村 私も普段は日本の国語や文化が幸運にも成立したという感覚がなく、水村さんの著書を読んで初めて知りました。先人たちが苦勞して英語を学び、その中で日本語が国語として成立していったということは忘却の彼方ですね。

水村 国民国家成立後の国語とは、あって当たり前のものに見えてしまうのです。ことに日本は国境争いでなどで苦勞をしていますが、昔、国語の授業で読んだ『最後の授業』（※3）は、アルザスがプロイセン王国領になるときに、アメル先生が「フランス万歳！」と最後に言い、それから急にドイツ語を学ばされる話。国民国家と切り離せないところに国語は存在し、その運命は国家の運命や方針に左右されることが大きい。

三村 日本でも例えば、明治政府の初代文部大臣となった森有礼を含めて、近年までたびたび「英語公用語論」が叫ばれるなど日本語の危機がいくつもあった。日本の歴史の中で、こうした苦勞があつて今我々の使っている日本語があることを



開国後の横浜。海外諸国を知る窓口となった



ドーデ著『最後の授業』（ポプラ社）に掲載の挿絵より

（※2）1850年ギリシャ生まれ、新聞記者・小説家・随筆家・日本研究家。帰化して「小泉八雲」と名乗る。著書に『骨蓋』『怪談』ほか。

（※3）ドーデの短編小説集『月曜物語』の一編。普仏戦争（1870〜71年）でフランスが敗れアルザスがプロイセン王国領に。アメル先生が「Vive la France（フランス万歳）！」と黒板に書いて、フランス語の「最後の授業」を終えた。



もつと伝えたほうがいいですね。そうしないと「日本語が亡びる」と言っても危機意識は生まれません。

国語としての日本語教育を基本に 一部をバイリンガルとして育成

三村 一方で「英語の世紀」とも言える今、水村さんは日本における英語教育について、現代の普通語である英語を国語にする、国民全員をバイリンガル（二重言語者）にする、一部の国民をバイリンガルにする、という三つの選択肢を提示されています。その中で、一部の国民のバイリンガル化を提唱されていますね。

水村 国民総バイリンガル論には賛成できません。これまで経済の世界では、流暢でない英語でも成果をあげることができましたが、問題は国際政治や外交の世界。過去の戦争も日本の言語的な孤立と無関係ではありません。ところが、日本語を母語とする人間が、世界に向かって意味ある発言を英語

のできるようになるのは、並大抵のことではない。少数精鋭しかないと思うのです。英語教育に格差をつけることが子どもたちに劣等感を与えるなどという心配は、平等という観念に固執しすぎるからです。すべての人が劣等感を持たずにすむ平等社会を実現しようなどとする、こと自体危険だと思えます。そもそも劣等感を持つことはそんなに悪いことではないと思えますし。重要なのは英語に堪能な少数の人とそうではない人との間に、経済的、知的な差が大きく開かないことです。所得の再分配と翻訳文化の充実でそれは保たれると思えます。

三村 インターネットの普及などで英語が全世界に流通する普通語になるのは仕方がないことです。私自身、1対1で会話する英語ではあまり問題はありませんが、複数メンバーによるデバイスでは難しいですね。自分の能力を100とする、英語で考えて話すときに発揮できるのは50〜60程度。そんなときは、なぜ日本が英語を国語にしてくれなかったのかも思えます。日本で総バイリンガル化を目指す教育は難しいのでしょうか。

水村 すでに成熟した国語を持つ上に、母語集団が大きい日本では難しいと思います。また、西洋語ではない日本語と英語との距離も大きすぎます。総バイリンガル化を目指して、道を聞かれて答える程度の英語ができる人が大勢いても意味がありません。政治家や官僚、弁護士など一部の人たちが、英語で世界各国と日々発止やりとりができるよう教育すべきだと思えます。そして、一方で、成熟した国語を持つ国として、まずはきちんと日本語を教育する。そしてそのための国語教育は国語の創設期に戻るのを基本とすべきです。例えばイギリスならシェークスピアに戻る。国の教育方針だけでなく、篤志家がシェークスピア劇の席を買い上げ、恵まれない子どもたちが見られるようにしたりしています。

日本の中学三年では国語の授業時間は英語より少ない（英語4時間、国語3時間）。西洋語圏ではふつう、国語教育に5



16〜17世紀以降、数多くの国や地域がイギリスの植民地・海外領土となり、国語として英語を採用した。右図は、過去イギリスの植民地・海外領土だった国・地域を示す



© ADINA TOVY AMSEL/SEBUN PHOTO /amanaimages

Cambridge University Library 等を参考に作成



時間を割いています。日本語の教育が疎かになって確かな日本語の読み手が少なくなっていくことは、自国の文化や文学の伝統を理解できない人が増えていくことです。日本でも、漱石や一葉の時代の作品を子どもの頃から意識的に読む訓練を通じ、国語の古典としての近代文学を受け継いでいくのを当然の教育理念とすべきではないでしょうか。

日本全体で危機意識を共有し 将来を見据えた取り組みを

三村 日本語の危機と同様に、私は今の日本における危機意識の希薄さを痛切に感じています。高率な法人税や派遣労働の問題、突出したCO₂削減コミットメント、さらにはTPP（環太平洋戦略的経済連携協定）への対応など、いわば製造業は海外に出て行けという政策になっています。日本全体として見たとき今後どうなるのかという危機感が非常に大きい。現在当社でもさまざまなプロジェクトを通じて海外で仕事

をすることを積極的に進めており、それ自体は合理的な方向だと思えます。ただし一方で、当社に限らず多くの経営者は、国内の雇用や地域との関係など、企業を超えて日本トータルで考えたときにためらいを感じているのも事実です。日本に海外企業が進出するどころか、自国の製造業にとつてすら、生産拠点を持つ国としての魅力が急速に薄れつつあるという危機意識が共有されていないことが問題です。

水村 アメリカの企業は「winner-take-all」という感じで、レイオフ（解雇）を含めて確信的に合理化を図ります。従業員が気の毒です。従業員を大切にしている日本企業は、そうはしたくない。でもその方向に動かざるを得ない現実がある。新日鉄は1985年のプラザ合意のとき、人員削減は行われたのですか。

三村 生産量が落ち設備を大幅に止めれば、当然人員を削減しなければなりません。その際、別の職場（グループ企業など）への異動や新規事業の創出で人員を吸収し、レイオフは一切やりませんでした。しかし、職場創出のための新規事業はほとんど失敗しました。結局多くのお金を使いましたが、その善し悪しは企業哲学の問題です。少なくとも社員に対しては残る人も出向する人も大切にして、社内からの反論はなかった。それはそれでよかったです。企業存立の最も重要な目的の一つは、従業員の生活を守り向上させることにあります。

水村 2008年のリーマンショック以降も、アメリカやイギリスと違って、ドイツと日本ではレイオフが少ないようですね。

三村 ただし、その実態の多くは社内失業です。内閣府の試算では600万人と言われていますが、社内失業が600万人いるということは、日本の失業率も実質的にアメリカと同等の10%程度ということになります。また新規採用を大幅に減らしたため若者が学校を卒業しても職がないという弊害も生まれています。このことをどのようにお考えですか。



シエークスピアの戯曲が数多く初演されたグロープ座（左）。写真（右）はイギリス王立植物園内の屋外シエークスピア劇場



写真：AP/アフロ

昨年10月横浜で開催されたAPEC（アジア太平洋経済協力）会議での各国首脳。貿易自由化を目指すTPPが提起され、現在日本国内で参加の是非が議論されている

© TRAVELPIX / SEBUN PHOTO / amanaimages



水村 従業員や地域を大切にしている日本の経営は良いものだと思いますが、トップが苦勞して雇用を守ろうとしても社員にその思いが伝わらず、結果的に危機感を持たないままの人間を温存してしまう弊害も出てくるかもしれませんね。

三村 そこが難しいところです。雇用にまで踏み込んだ聖域なき合理化が必要なほど大変な状況にある場合には、その危機感を、経営者だけでなく、社員や地域、産業界などを含めた全国民が共有するべきだと思いますね。

また少し話は変わりますが、私は産業界の人間として、日本が強みとする「ものづくり立国」の足腰を強化していく上で、現在進んでいる少子化に大きな危機意識を持っていきます。少子化対策は最も効果的な成長戦略だと思いますが、いかがでしょうか。

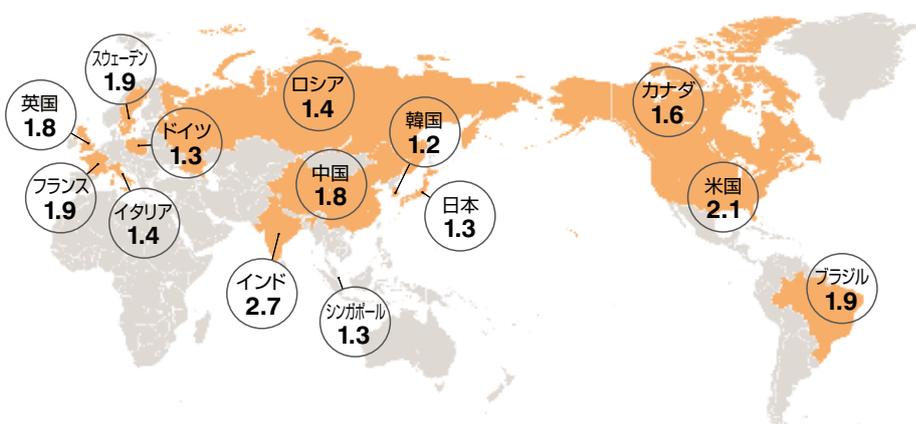
水村 先進国の出生率の低下は大きな問題で、なかでも最も早く高齢社会を迎える日本にとっては最も大きな問題だと思います。ご存じのようにフランスでは、国や地域が約20年にわたり日本の4〜5倍の財政を支出し子ども2人以上を奨励する手厚い少子化対策に取り組んでいます。手当支給に加えて、子どもが3歳になるまでの休職や復職後の地位も保証しています。また少子化対策と関連する女性の就労問題でも、女性の政治や経済界への進出を後押しする施策として、比例代表選挙で議員候補の約5割を女性とすることや一部上場企業で一定割合以上の役員を女性にすることを義務付けています。日本でも早急にそうした国の将来を見据えた施策を検討せねばと思います。

幅広い視野から現状を捉え なすべきことを実行する2011年に

三村 今後、危機意識を高める意味でも、日本人は外国にどんどん出ていくべきだと思いますが、いかがでしょうか。

水村 今日本人は外国の翻訳文学もあまり読まなくなり、外国にも出たがらなくなってきました。明治初期には、維新

世界主要国の出生率
フランスでは少子化対策の効果もあり、高い出生率が維持されている



※数字はすべて2008年時点 参考資料：Unicef「世界子供白書2010」

の志士を中心に、皆が海外へ出たがった。当時は国にも個人にも危機意識がありました。今の日本は夢はなくともラクチンなので、出たくないのばかりですが、本来は危機意識を持つべき状況です。2007年のイェール大学入学願書提出者は日本人が21人。一方で、韓国人は2000人。中国はさらに多い。自主性に任せていたらだめで、若者が海外に出やすい仕組みづくりが必要です。

三村 現在当社でも、海外駐在、海外留学、海外合弁事業への派遣などを通して従業員の15%が海外経験をしています。今後は海外を見た目で日本の現状を正確に捉えて考えることが、ますます重要になってくると思います。

水村 15%は悪い数字ではないと思います。しかし企業に入るときにはすでに22歳。少数精鋭の人材の育成には、その前の段階から取り組む必要があるでしょう。特に言葉は運動神経のようなもので、ある程度若いうちから学ぶのが重要です。

三村 先日、国際会議で「日本人は教育レベルが高く従業員は真面目で一生涯懸命働き、技術レベルも高い。しかも背後には成長するアジアがあるのに、なぜ国として元気がないのか」と聞かれて答えに窮しました。またこの国も「国益」を考えて発言し行動している中で、日本は「世界平和や世界の環境対策のために」とは言うものの、「日本の利益を代表して」といった言葉はなかなか出てきません。

水村 日本では戦後知識人の間で「国家」を語ることがタブーでした。今は「国家」に関して思考する若い世代が出てきていますが、思考を停止したままこれまで60年間やってきた。いまだに文学の世界では「国家」や「国語」は悪玉です。国家が「国益」を考えないで誰が考えてくれるのか。日本は「国益」が必ずしも他の国の迷惑にはならないというモデルを提示する方向にいつてくれればと思います。日本の企業も「国益」を射程に入れて行動していただければと思います。

三村 国益に叶わないことをやると長期的にはしっぺ返しを受けることになり、特に当社のような企業では、国が

発展すると企業も発展します。イギリスの大使が自分のことだけを闇雲に考えるのではなく、周辺に与える影響を考えた上で主張すべき国益のことを「開かれた国益(enlightened interests)」と言っていました。日本があまりに国益を主張しないのは歯がゆいですね。

水村 ことに文学者は、市場があるから小説が流通し、安定した国家があるから市場があるといった背景をあまり考えません。文学者が食べていけるのは、稼いでくれる企業があり、日本が豊かだからです。さらには義務教育の徹底や言論の自由が国家によって保障されているからです。私たちはすごく恵まれた状況で書いていると思います。

三村 また今後海外で仕事をするようになればなるほど、自分たちの言葉や文化を大切にする必要があると思いますが、いかがでしょうか？

水村 国際的に活躍する人には、リベラルアーツ(一般教養)をきちんと身に付けた人が多いですね。まずは自国の文化や歴史をきちんと理解し、誇りを持ってそれを海外で発信する人がやはり信用されます。この点からも、今後海外ビジネスの最前線で活躍される方には、日本語を読み継ぎ日本文化を継承していくことが大切になると思います。同時に、世界的な一般教養を身につけるため、世界の人が古典と認識しているような書籍を、日本にせっかくある翻訳文化を利用して、できるだけ読んでいただければと思います。

三村 現在世界は大きく変化して、日本の存立基盤を揺るがす構造的変化が起きています。その中で、今後日本がいかに対処すべきかについて、私自身今まで感じたことのない危機感を抱いています。日本は小さな幸せに満足する余裕はありません。幅広い視野から危機意識を共有して日本がなすべきことを真剣に議論し、早急に実行する。そんな2011年にしたいですね。本日は貴重なお話をいただきありがとうございます。

(この対談は、2010年11月8日、当社南平台公邸で行われました)



今後の海外でのグローバルな活躍に向けて、英語研修に取り組む新日鉄社員

昨年『文藝春秋』に掲載された当社の広告。日本・アジア・環大西洋圏の世界3極グローバル体制を目指す

先達の先へ、新日鉄
www.nssc.co.jp



新ランドマークに ふさわしい新鋼材

東京スカイツリー®の柱とブレース、ゲイン塔に、新日鉄の建築構造用高降伏点鋼が採用され、鋼構造建築物の新たな可能性を切り拓いている。



展示ブースのフレームを高耐食性めっき鋼板スーパーダイマ®でつくり、外周を「郷土の森づくり」「海の森づくり」の展示で囲み、自然との共生を目指す新日鉄グループを表現。

「エコプロダクツ 2010」に出展

地震国ニッポンの建物を 守る耐震・制震部材

新日鉄エンジニアリング(株)の「アンボンドブレース」は、地震エネルギーを柔らかく吸収し、鉄骨部材の破断・損傷などを防ぐロングセラー製品。



新日鉄グループは2010年12月9～11日、入場者数が18万人を超える日本最大級の環境展示会「エコプロダクツ2010」(東京ビッグサイト)(産業環境管理協会、日本経済新聞社主催)に出展した。今回の展示コンセプトは「いのちとくらしを支え、社会の持続可能な発展に貢献する新日鉄グループ」。地球環境問題の解決や社会の発展に向けた新日鉄グループの取り組みについて、身近な製品からビッグプロジェクトまで具体的な事例を通じて紹介し、ブースを訪れた約1万2,000人の来場者の関心を集めた。



寺社仏閣を守るチタン屋根

チタン屋根材は、瓦や銅などの従来素材に比べ、軽くて強く建物自体の耐震性や耐久性を向上させる上、半永久的に葺き替えが不要で、浅草寺本堂の屋根に採用された。



人工衛星「はやぶさ」の構造材料に炭素繊維

新日鉄マテリアルズ(株)グループの日本グラファイトファイバー(株)の炭素繊維製品が、「はやぶさ」のアンテナに使用された。軽量で剛性が高く寸法安定性に優れた炭素繊維は、人工衛星の構造材に使用されている。



小中高校生の環境学習をサポート

新日鉄はエコプロダクツ展を環境コミュニケーションの重要な機会と捉えており、一般の人々や小中高校生に対して、新日鉄グループの地球環境問題への取り組みをわかりやすく伝えることに努めている。

その一環として新日鉄は、毎年、神奈川県立海老名高等学校で「エコプロダクツ展事前授業」を行っている。海老名高校は環境学習にエコプロダクツ展を活用しており、当社環境部環境技術グループリーダーの本多清之が事前に同校で講義し、生徒たちの関心を高めた上で、展示会当日、当社ブースを案内。同校生徒に企業の環境への取り組みを深く理解してもらう機会を提供した。

また小中学生向けには、展示ブース内でクイズラリーを行い、正解者に新日鉄の好評絵本シリーズ『新・モノ語り』をプレゼントするなど、事後学習に役立つ資料も配った。



海老名高校での事前授業の様子

新エネルギーにも最新の化学技術

新日鉄化学(株)が開発した負極電極材は、石炭化学技術と電子材料技術で培った塗工プロセスを融合させ、大型リチウム電池に欠かせないユニークな材料。



自然環境を保全できる斜面防災技術

樹木を伐採し斜面をコンクリートで覆うのが、従来のかけ崩れ対策。しかし日鉄住金建材(株)の「ノンフレーム工法」は、施工後も元々の自然環境が保全できる画期的な工法だ。

スマートコミュニティ 創造事業にグループで参画

新日鉄ソリューションズ(株)、(株)新日鉄都市開発、(株)日鉄エレクトックスなどが共同で、低炭素社会に向けた地域のエネルギー管理と、それによるコミュニティの付加価値向上を目指すスマートコミュニティ創造事業の実証実験に参画。





ものづくりの魅力を 「たたら」の炎で 熱く伝える



新日鉄は、千年以上の歴史を持つ日本独特の製鉄法である「たたら製鉄」を通じて、ものづくりや鉄づくりの魅力をより深く知り楽しんでいただくため、たたら製鉄の実演を全国各地で開催・支援している。

NPPO法人ものづくり教育たたら 「第8回たたらサミット IN 姫路」を開催

「第8回たたらサミットIN 姫路」が2010年12月3～6日の4日間、兵庫県姫路市で開催された。主催のNPPO法人ものづくり教育たたらは、新日鉄をはじめとする鉄鋼各社が協賛して立ち上げた団体で、東京藝術大学教授(東京工業大学名誉教授)の永田和宏氏が理事長を務め、主に小・中・高・大学生に対して、たたら操業の体験学習指導を行っている。

こうした中、学生・先生や愛好家が一同に集う場として、1996年にたたらサミットがスタートし、2年に一度全国各地で開催されている。

今回のサミットも、たたら製鉄を研究する団体が全国から集まり、実際にたたら操業を行う「たたら競演会」や、たたら製鉄に関するシンポジウム、小学4年生から高校生とその保護者を対象に10台の炉を設置して鉄づくりを行う「たたら研修会」などが行われた。

たたら研修会では、ものづくり教育たたらスタッフの指導のもと、130人ものほる参加者が、れんがなどを使って

炉をつくり、1基あたり砂鉄20kg、木炭40kgを投入。空気を送りながら炉の下から不純物(ノロ)をかき出し、火入れから5時間後に真っ赤に焼けた鋼のかたまり(ケラ)3.5kgが取り出されると、鉄ができる瞬間を目の当たりにした子どもたちから大きな歓声がわき起こった。

またシンポジウムでは、東京大学准教授の宮本英昭氏が「鉄137億年の宇宙誌」、火箸風鈴で知られる鍛冶職人の明珍宗理氏が「明珍風鈴と音の技」をテーマに講演を行ったほか、学校研究機関・市民グループなどが交流を深めた。

室蘭

若手社員の 能力向上を図る

室蘭製鉄所は2010年8月8日、北海道室蘭市で開催された「2010 むらんファミリーフェスティバル」でたたら製鉄の実演を行った。実演は毎年、若手社員の結束力とリーダーシップ能力を向上させ、ものづくりの面白さや大切さを学ぶ研修の一環として実施されている。当日は真夏の

炎天下での苦
労が実り、11
kgのケラがで
き上がった。



釜石 近代製鉄発祥の地で 鉄づくり体験会

釜石製鉄所は2010年7月31日、近代製鉄発祥の地である釜石市大橋地区で「鉄づくり体験会」を開催した。一般公募で参加した皆さんは、木炭割りで顔が真っ黒になりながらも、ノロ・ケラ出しのときに大きな歓声を上げていた。どの炉も無事にケラ出しに成功し、子どもたちはでき上がったケラをうれしそうに持ち帰った。



名古屋 新入社員と 中学生で実演

名古屋製鉄所は2010年11月14日、愛知県東海市で開催された「東海秋まつり2010」で、「たたら製鉄実演会」を実施した。実演会では、2010年度の新入社員のスタッフに「東海市青少年センターほっと東海」の中学生8人が加わり、炉の製作からケラ出しまで披露した。たたら製鉄を一目見ようと、多くの観衆が集まった。



広畑 5年連続で 地元小学校へ出前実演

広畑製鉄所は2010年12月3日、兵庫県姫路市立広畑小学校でたたら製鉄を実演した。5年目を迎えた今回も、児童は広畑製鉄所でたたら製鉄や近代製鉄について学び、熱延ラインを見学した後、同校運動場に模擬炉を組み立てた。炉には近隣の新舞子浜で採取した砂鉄を原料の一部として装入し、製鉄所員が炉からケラを取り出すと児童たちから歓声と拍手がわき起こった。



八幡 地域共生と 人材育成を促進

八幡製鉄所は2010年11月28日、東田第一高炉史跡広場(北九州市八幡東区)で製鉄所・関連会社社員などの人材育成を目的に、たたら製鉄を体験するイベント「東田たたらプロジェクト2010」(育成たたら)を開催した。北九州産業技術保存継承センター主催の「市民たたら」も同時に行われ、製鉄所OBや東田たたらプロジェクトOBが村下・副村下(リーダー)を務め、参加した親子はものづくりの楽しさを味わった。



環境・教育分野で地域に根ざした社会貢献活動を展開

新日鉄はものづくりの大切さや鉄鋼業の環境保全への取り組みなどを幅広く理解していただくため、未来を担う子どもたちとその教育に携わる教員や関連団体の皆さんと積極的に交流し、環境・教育分野で地域に根ざした社会貢献活動を展開している。



「高炉でまえ見学所」では耐火服を着て記念写真を撮る子どもたちが絶えなかった

君津製鉄所は2010年8月7日、第15回君津市民ふれあい祭りの新日鉄会場イベントの一つとして、小学生を対象にした「理科実験教室・理科屋台」を開催した。講師に蔵前工業会(東京工業大学OB主宰)の皆さんを招くとともに、君津製鉄所若手技術者有志が焼き入れ実験など9つの理科屋台を出展し、製鉄所員が演出する手づくりのおもてなしで「鉄を科学する面白さ」を伝えた。会場は夏休み中の親子連れで大変なにぎわいを見せ、「鉄ってすごい」「鉄をもらえてうれしかった」「大人でも感動しました」などの声が寄せられた。

社員の手づくり
理科屋台
君津



知多自然観察会の方から食物連鎖の説明を聞く参加者

愛知県東海市主催のエコスクール参加者が2010年5月8日、名古屋製鉄所の環境保全を観察した。エコスクールは、豊かな感性で環境へのつながりや問題の本質を理解し、自ら進んで環境問題に取り組むことのできる人をつくるため2008年から始まった。今回は30人の親子が参加し、1972年に横浜国立大学の宮脇昭名誉教授の指導のもと植樹した、名古屋製鉄所の環境保全林の成長や森の中の生き物を観察した。参加者は枯れ葉の下に生息するセミの幼虫やミミズなどを見つけては歓声を上げるなど、郷土の森の自然を満喫した。

エコスクールで
郷土の森を観察
名古屋



スチール缶収集校に贈った花の苗を植える児童たち

八幡製鉄所はゲストティーチャーとして地元小学校を訪問し、スチール缶のリサイクル活動や地球環境と鉄との関係などをテーマに「出張授業」を実施している。2010年度は15校で授業を行い、八幡製鉄所の高品質の鉄づくりについて、原料の調達から環境に配慮した生産プロセスにいたるまで紹介した。また、スチール缶収集校に花の苗を贈呈し生徒たちに植樹してもらった「花いっぱいプラン」を推進して情操教育に協力するほか、環境授業実施に顕著な成果をあげている学校には、雨水タンクを贈呈する支援を行い、水の大切さを学習する機会も提供している。

リサイクルや
地球環境と鉄を
テーマに出張授業
八幡



大分市立原川中学校での理科出張授業

科学の心を養う 理科出張授業

大分

大分製鉄所は2007年から年8回のペースで、近隣地域の小中学校を対象に「理科出張授業」を実施している。社員による出張授業は生徒に興味を持つてもらえ帰宅後に家族で話題になるようなもの、学校では実験として行っていないもので原理・原則は通常の授業内容に結びつくものをコンセプトにしている。実験から驚きや感動を味わい科学の心を養うことを目指し、生徒たちが実際に実験に参加しながら授業を進めている。



参加者に手づくりの壁掛けが贈られた

参加者の声 「製鉄所に対するイメージが打ち砕かれました。資源リサイクル、環境整備、地域との交流などさまざまな発見がありました。日本の技術はすごい！」(3年生 田中成洋さん)

鎌ヶ谷西高校が 現代の鉄づくりを 学習

君津

2010年11月、千葉県立鎌ヶ谷西高等学校の生徒と先生の16人が「サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト」(SPP)の一環で、君津製鉄所を訪問した。SPPは、独科学技術振興機構の事業で、学校と大学・科学館などが連携して、観察、実験、実習などの体験的・問題解決的な学習活動を行うもの。品質管理部の社員から製鉄の歴史や技術について講義を受けるとともに、高炉・大形工場などを見学した。



エネルギー・環境をテーマとした理科実験に取り組む枳形中学校の生徒たち

枳形中学校で エネルギー環境 ワークショップ

川崎

2010年12月17日、神奈川県川崎市立枳形中学校で毎年恒例の「エネルギー環境ワークショップ」が開催された。新日鉄環境部とプロセス技術部の社員が講師となり、鉄鋼業の環境への取り組みを紹介するとともに、廃プラスチックのリサイクルと燃料電池車を走らせる実験を行った。生徒たちは、ペットボトルなどのプラスチックが熱分解により油や炭素に戻ることや水素が発生することに驚き、熱心にワークショップに取り組んだ。



参加者の声 「体験活動を行うことで生徒と同じ目線に立てる機会を得ることは非常に重要であり、役に立ちました。また組織活性化や危機管理、コンプライアンス推進などは、学校の現場でも求められており、大変参考になりました」(北海道伊達高等学校 教諭 岡本浩一氏)



新日鉄は名古屋・室蘭両製鉄所で「教員の民間企業研修」(財)経済広報センター主催)を実施した。夏休み期間中、小中高校の先生方計14人に製鉄工程やプラスチックリサイクル工場などを見学し、製鉄所における環境保全や人材育成、製造実力向上の取り組みを紹介するプログラムで、新日鉄の企業活動への理解を深めていただいた。

教員の 民間企業研修を 実施

名古屋・室蘭

海外でも次代を担う青少年の育成を支援

新日鉄はグローバル企業として世界各地域で活動しているが、その中で地域社会において青少年の育成や日本に対する理解を深める事業支援など、特色ある社会貢献活動を行っている。今号ではケニアと中国における事例を紹介する。

ケニアで職業訓練学校に寄付



現地訪問した樋口眞哉常務執行役員(前列左から3人目)

金属加工講習の様子

新日鉄は「Mabati Technical Training Institute」(MTTI)への寄付を通じて、アフリカ・ケニアの青少年に対する職業訓練を支援している。MTTIは2004年、新日鉄のアフリカにおける主要需要家の一つである「Mabati Rolling Mills Ltd(マバチ社)」によって設立。近隣地域の働く意欲のある青少年の自立を支援することにより、貧困や失業、薬物乱用、HIVなどアフリカ社会が抱える問題に対処する目的で、2年間の職業訓練を行っている。

MTTIでは現在、電気や服飾、溶接、家具製作、自動車整備、大工などの技能講習に185人、会計・コンピューター講習に127人が学び、過去5年間で受講生の95%が国家資格試験に合格し、80%以上が就職する実績をあげている。母子・父子家庭や孤児の受講生も多く、毎年定員を上回る応募がある一方、運営資金確保が活動継続の最大の課題となっており、これまで費用の大半をマバチ社からの寄付に頼っている。

マバチ社は、当社と南アフリカで合弁事業「サファル・スチール社」を運営するサファルグループ傘下の大手薄板圧延メーカーで、当社とは40年に及ぶ長期安定的な鋼材取引実績を持つ。新日鉄は今回、MTTIの運営費として3年間分約200万円の寄付を実施し、MTTIの活動を支援していくこととした。

※ Government Trade Test Exam

中国人大学生の訪日事業に参画



近所の公園にて

双方楽しい時を過ごす

ホームステイ受け入れ

ブリキ営業部海外営業グループ

マネジャー 黒田 勘太

ホームステイ体験学生 郁 琼源さん
北京伝媒大学 外国語学院(3年)
(第一外国語で日本語専攻)

我が家で郁さんが過ごした時間はわずかですが、お互いに楽しく過ごしました。郁さんは優しく、娘と仲良く遊んでくれました。郁さんの希望で東京タワーや皇居を巡りましたが、眺めも含めて東京は非常にきれいだと思います。また、近所の温泉にも行き、日本での日常生活の一端を肌で感じてもらったのではないかと思います。

新日鉄鉄鋼情報コンサルティング(北京)は、中国日本商会の社会貢献事業「走近日企・感受日本」(日本企業に触れ、日本を感じよう)に参画している。中国日本商会は中国に進出している日本企業で組織され、現在、新日鉄北京事務所長が同会の副会長を務める。同事業は2007年から始まり、年2回中国人大学生を日本に招き、会員企業の見学、地方視察、大学訪問、会員企業の社員宅でのホームステイなどを行っている。新日鉄では、第一回訪日団から君津製鉄所見学やホームステイの受け入れを行っており、2010年も社員宅で温かい交流があった。

新日鉄鉄鋼情報コンサルティング(北京) 有限公司 マネジャー 長南 隆



本事業は、毎年2回、各企業・社員の協力を得て実施しています。

特にホームステイは週末を利用した短い時間ですが、中国人大学生に日本の家庭での団欒や生活習慣の違いなどを直接肌で感じてもらう機会となる一方、受け入れ家庭にとっても、日中の将来を担う学生との交流は大きな刺激になることと思います。

本事業が日中の相互理解の一步となることを願って、今後も活動を続けていきます。



正門横にある鋼管稲荷。鳥居は製造所でつくられた鋼管で組まれている

1935年、東京都板橋区に設立された東京製造所は、その地の利を活かして高級小径シームレス鋼管の製造拠点として歩んできた。隣接する新河岸川は荒川から引き込まれた運河で、君津製鉄所の鋼管材料(丸ビレット)を船で運び込んでいる。

新日鉄の

ECO

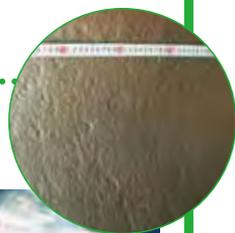
原油・海水中での耐食性が高い **マリロイ® 鋼管**

Products

マリロイ鋼管は、これまでの多くの採用実績があった原油用の荷油管に加え、海水用のバラスト管にも本格採用されることが決まりました。バラスト管は鉱石運搬船、自動車運搬船などさまざまな船種で使用されるため、マリロイ鋼管の需要の拡大が期待できます。

原油タンカーにおいて原油や海水の積み降ろしに使用される鋼管には、通常、塗装した炭素鋼鋼管が使用されています。これに対し、新日鉄の「マリロイ® 鋼管」はクロムを添加して耐食性を改善した鋼管で、内面無塗装で使用可能です。そのため建造時の塗装工程の省略、工期の短縮、航海後の補修省略(回数低減)などコストを大幅に削減できます。

タンカーのバラスト管として15年経過後の鋼管内面(錆落し後)。深い腐食は見られず耐食性の高さがわかる



電気・計装・情報通信設備やコンピュータシステムのエンジニアリング、設計・施工・整備などを手がける(株)日鉄エレックスは、2010年11月、同社北九州事業センター内に「FA開発センター」を竣工した。自動車向けなど二次電池(充電型電池)需要が急速に拡大する中で、その製造に欠かせない充放電検査装置システムの組立・出荷試験と技術開発が一体となって進められる体制が整った。

二次電池需要の拡大に対応 「(株)日鉄エレックス「FA開発センター」



FA開発センター外観



竣工式で挨拶する吉田社長

日鉄エレックスは、製鉄所の電気・計装設備の設計・施工・メンテナンスなどで培った技術力をもとに、1988年、工場の加工・組立・搬送・検査・保管などの機能を自動化するファクトリーオートメーション(FA)事業に進出。FA用の装置やシステムの設計・製作を行っている。

92年にPCを基調とした各種試験装置の設計・製作を開始し、93年には、小型リチウムイオン電池の検査装置分野に進出。電池の性能評価を行うサイクル試験システムと、電池の基本性能を検査しランク分けを行う充放電検査装置システムを提供し、この業界でトップシェアを確保している。

現在、二次電池は、電気自動車やプラグインハイブリッドカーなどの車両用をはじめ、産業機械用や、太陽光・風力発電などの蓄電用を中心に需要が急速に拡大し、それに伴い、充放電検査装置システム、燃料電池評価システム(写真1)など電池の製造に欠かせない検査システムに加えて、車載用電池に向けた急速充電器(写真2)の需要も増大している。

従来、日鉄エレックスは、それらシステムの出荷前検査、商品改良、および研究開発を北九州学術研究都市など



写真1 燃料電池評価装置
家庭のコジェネから自動車のフェセルセルテスターまで、商品化を見据えた開発に取り組む

北九州市内の近傍施設で行ってきたが、効率性と市場対応能力の向上を図る観点から、これらを一体化して進めることができる「FA開発センター」の建設を進め、2010年11月に竣工した。この建設により同社は、温室効果ガス低減に貢献する技術開発または製品をつくる企業を対象に北九州市が2010年度に創設した「環境・エネルギー技術革新企業集積特別助成金」の適用第1号となった。

FA開発センターでは、今後、技術競争力をさらに向上させ、高い品質保証レベルを維持しつつ、お客様との技術交流の促進とさらなる連携強化を図っていく。

吉田博年社長は、竣工式と同時に行われた記者会見で「FA事業はお客様からの要求が厳しく競争も激化しており、市場で勝ち抜くには技術革新が常に求められます。『FA開発センター』を当社のFA事業における技術開発の中心機能と位置付けて、電池関連事業の強化と事業創出に向けた取り組みを推進し、スピーディに商品開発を行っていきたいと思います」と抱負を語った。



写真2 急速充電システム
電気自動車などの急速充電システム。充電装置本体の液晶画面により容易に充電状況がわかる



Midland Rolling Mills 全全景

経 営
ナイジェリアの
冷延鋼板製造・販売会社
への出資に合意

新日鉄と伊藤忠丸紅鉄鋼(株)は、SAFALグループが経営するナイジェリアの冷延鋼板製造・販売会社Midland Rolling Mills Ltd.に対し、

各社300万ドルの出資を行うことで合意した。同社はナイジェリア初の冷延ミルで、2011年1月から冷延設備を本格稼働させる。今回の出資によって、同社への原板供給を通じ、拡大が見込まれるナイジェリアと近隣地域における鋼材需要を捕捉していく。

総務部広報センター
▲03-6867-2135



10周年記念行事での日本人派遣者

経 営
ブラジル・ウニガル社
が営業運転開始10周年

新日鉄とブラジル・ウジミナ社の自動車用亜鉛めっき鋼板の合弁会社「ウニガル」が、2010年10月に営業運転開始10周年を迎えた。自動車生産の急速な拡大、防錆化の進展により、南米の自動車用亜鉛めっき鋼板需要は急速に増大しており、1号CGLは10月に累計生産量400万トンを達成。来春、2号CGLの立ち上げを計画している。



ネーベス社長(左から2人目)と川野副社長(左から3人目)

総務部広報センター
▲03-6867-2135

経 営
西村工機(株)を
子会社化

2010年11月、新日鉄は有力なプレスバンド(厚板を押し曲げて鋼管に成型する製法)メーカーである西村工機(株)を子会社化した。同社は長年エネルギー関連プロジェクトに参画。寒冷地や深海など過酷な環境を前提とした仕様に対応し、大径厚肉鋼管製造に関する高い技術を培ってきた。今後、新日鉄グループとしての連携を強化し、一貫競争力強化や鋼管事業におけるシナジー効果の拡大で、さらなる利益成長を図っていく。



(左から)新日鉄樋口常務執行役員、西村工機西村昌三前社長と山根信社長

総務部広報センター
▲03-6867-2146

製 品
「高変形能UO鋼管」が
ロシア・ガスプロム社
のパイプラインに採用

新日鉄の「高変形能UO鋼管」が、ロシア・ガスプロム社のロシア極東地域における天然ガスパイプラインプロジェクトに採用された。極低温環境下の地震地帯や永久凍土地帯といった地殻変動が起こりやすい過酷な環境で、約20kmにわたり使用される。今回、高変形能鋼管としては世界最大規模の約2万トンを、新日鉄と日鉄商事(株)が共同で受注した。



総務部広報センター
▲03-6867-2146

製 品
新日鉄住金ステンレス(株)
世界初の新ステンレス鋼
第二弾を商品化

新日鉄住金ステンレス(株)は、独自に開発した世界初の微量錫添加によるフェライト系(タロム系)ステンレス鋼の耐食性を飛躍的に向上させる技術を用いて、新たに「省資源型・高耐食高純度フェライト系ステンレス鋼NSSC®FW2(フォワード・ツー)」を開発・商品化した。

FW2は世界の全ステンレスの4割以上を占める「SUS304」と同等もしくはそれ以上の一般耐食性を備える。FW2はニッケル、モリブデン、銅を添加していない16%Cr鋼で、レアメタルの含有量をSUS304に対して10%程度、40%削減。成形加工性にも優れ、極めて幅広い用途への適用が可能にした。

新日鉄住金ステンレス(株)
商品開発部
▲03-3276-4890
専用ウェブサイト
<http://www.nssc.co.jp/tw>



改良型塩水噴霧腐食試験(塩水環境)

www.nssc.co.jp

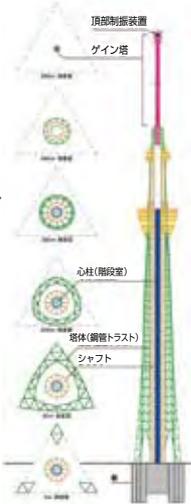
新日本製鉄発行のプレスリリースは、ホームページに全文が掲載されていますのでご参照ください。

製品
東京スカイツリー®ゲイン塔
に国内最高レベルの
設計強度を持つ鋼管が採用

新日鉄が開発した降伏強度700N/mm²級の高降伏点鋼管「PHY700PB」が、東京スカイツリー®のゲイン塔に採用された。本体塔での降伏強度400N/mm²、500N/mm²級の鋼材に続き、建築構造用鋼管として国内最高レベルの設計強度（降伏強度）を持つ建築用プレスベンド鋼管（厚板をプレスにより円筒形に成形した後、継目を溶接してできる鋼管）が、高さ634メートルの電波塔を支える。



ゲイン塔 (PHY700PB 鋼管) 製作状況
写真提供: (株) バコーボレーション



東京スカイツリー®ゲイン塔
画像提供: (株) 大林組

総務部広報センター
▲03-6867-2146

製品
「エココート®S」が
電気自動車シボレーVOLTに採用

新日鉄はカナダ・スペクトラ社より、航続距離延長型電気自動車シボレーVOLTの燃料タンク素材として「エココート®S」を受注した。タンク製造メーカーである同社との長年の技術交流を通じて、環境対応車に最適な耐食性・加工性・環境性能向上に取り組んだ結果が、今回の受注につながった。

総務部広報センター
▲03-6867-2135



エココート®Sが採用されたシボレーVOLTの燃料タンク

製品
ベトナムで鋼管杭打設デモンストレーションを実施

新日鉄とニッポンステールパイプベトナム (NPV社) は、2010年10月26〜28日、鋼管杭の打設デモンストレーションをベトナム・フーミーII工業団地内で開催した。NPV社はスパイラル鋼管工場を同工業団地で建設中 (2011年5月操業開始予定) であり、同社が提供するスパイラル鋼管杭のコスト・施工優位性を、ベトナム国内で杭設計・施工に携わる幅広い層にPRした。

総務部広報センター
▲03-6867-2135



総務部広報センター
▲03-6867-2146

製品
浅草寺本堂の
チタン屋根が完成

浅草寺宝蔵門に引き続き、今般、チタンを使用した本堂の本瓦葺き屋根が完成した。同物件は「多くの人が訪れる場所であり、災害に強いものを」との施工主の意向で、50年ぶりの葺き替えに際して、従来の日本瓦に替えて、軽量で耐久性に優れるチタンが採用された。屋根重量は約930トンから約180トンへと5分の1に大幅低減した。



浅草寺本堂全景と
本堂チタン屋根(拡大)



製品
「ジャイロプレス工法®」
道路擁壁への適用が
本格化

(株) 技研製作所と新日鉄が共同開発した「ジャイロプレス工法®」の道路擁壁への適用が本格化している。2004〜2007年度の実績は鋼材重量で約700トンだったのに対して2008年度以降、大阪中央環状線道路改良工事に800トン、加古川バイパス溝之口BOX改良工事に1400トン採用され、着実に実績を伸ばしている。2010年7月時点で工事件数46件、鋼材重量2万トンを超える実績をあげている。



道路擁壁の施工模式図

総務部広報センター
▲03-6867-2146

新日本製鉄発信のプレスリリースは、ホームページに全文が掲載されていますのでご参照ください。

紀尾井ホール 新日鉄文化財団 公演ご案内

邦楽ドラマ

浪花女「壺坂靈験記」

3月23日(水)/18:30
3月24日(木)/14:00、18:30
3月25日(金)/14:00、18:30
3月26日(土)/14:00



佐久間良子

文楽の名作「壺坂靈験記」の誕生にかかわった人々の姿を芝居と人形浄瑠璃で描く邦楽ドラマ。主人公のお千賀役には佐久間良子を配し、義太夫の生演奏に加え、人形も登場する贅沢な舞台。開館15周年を迎えた紀尾井ホールならではの特別公演です。

スケジュール

1月25日(火)/19:00
紀尾井ニュー・アーティスト・シリーズ
ヴァイオリン：梁美沙
ショーソン 詩曲Op.25
シューベルト ヴァイオリンとピアノのための幻想曲ハ長調 ほか

2月13日(日)/18:00
アンドラーシュ・シフ
ピアノリサイタル
バッハ「平均律クラヴィアア曲集第2巻」

2月18日(金)/19:00
19日(土)/14:00
紀尾井シンフォニエッタ東京
第78回 定期演奏会
指揮：下野竜也
ベートーヴェン 交響曲第4番、
第5番「運命」 ほか

お問い合わせ・チケットのお申し込み先
紀尾井ホールチケットセンター (日・祝休)

TEL 03-3237-0061

http://www.kioi-hall.or.jp



準決勝でワールドランキング3位のチョリエフ(ウズベキスタン)と対戦する西山選手

スポーツ 柔道部・西山将士選手 が「グランドスラム東京 2010」で初優勝

新日鉄柔道部の西山将士選手は2010年12月12日、東京体育館で行われた「グランドスラム東京2010」国際柔道大会で90kg級に出場し、強豪を倒し見事に初優勝を飾った。

グループ 新日鉄ソリューションズ(株)が導入した 国立環境研究所衛星データ解析用システムが Green500 Top10入り

米国ルイジアナ州ニューオーリンズで開催されたSC10(世界最大の高性能計算機に関する国際会議・学会)において、新日鉄ソリューションズ(株)が2010年3月に(独)国立環境研究所へ導入した、温室効果ガス観測技術衛星GOSAT(愛称「いぶき」)プロジェクトの衛星データ解析用システム

(GOSATRCF)が、世界のスーパーコンピュータの環境性能を競う最新ランキングであるGreen500でTop10にランクインし、性能のみを競うTop500においても102位にランクインした。

新日鉄ソリューションズ(株)
総務部広報・IR室
▲03-5117-6012

グループ 地域交流、防災に配慮した「リビオタワー板橋」が竣工

(株)新日鉄都市開発、板橋三丁目地区防災街区整備事業組合、(財)首都圏不燃建築公社が東京・板橋区で開発を手がけるタワーマンション「リビオタワー板橋」が竣工した。同物件は、防災街区整備事業として認可を受けた首都圏初の官民共同による事業で、住民の交流や防災の拠点となる計画を盛り込み、地域への貢献も目指した。



(株)新日鉄都市開発 広報
▲03-3276-8800

グループ 新日鉄エンジニアリング(株) 「中国国際グリーン産業 博覧会」に出展

新日鉄エンジニアリング(株)は2010年11月24〜27日の4日間、中国・北京で開催された「中国国際グリーン産業博覧会」(主催・中国商務部ほか)に出展した。同社初の海外博覧会となった今回、コークス乾式消火設備や石炭調湿設備、回転炉床式還元炉、溶融炉、ガス精製などを展示し、環境・省エネルギー関連商品の技術力の高さをPRした。また新日鉄のスチールハウスも展示し、グループ全体のプレゼンスもアピールした。



ブース全景

新日鉄エンジニアリング(株)
総務部広報室
▲03-6665-2366

環境 釜石製鉄所 林地残材バイオマス 資源の本格利用を開始

釜石製鉄所は2010年10月から、木を伐採・造材した後に残る枝葉・梢端部分や間伐材など林地残材バイオマス資源の既設石炭火力発電所での石炭混焼試験を開始した。2011年度以降の計画では、混焼率2%(重量比)で年間5千トンの林地残材バイオマス資源を活用し、年間約7千トンのCO₂削減を見込んでいる。

本事業は製造業における省エネルギー、温室効果ガス削減にとどまらず、森林整備、林業振興、雇用創出、地域経済活性化などにも大きく貢献することから、さらなる利用拡大の可能性も検討していく。

総務部広報センター
▲03-6867-2146

陸の森も大切、
海の森も大切



さまざまな生命を育む森。新日鉄は、2つの森づくりに取り組んでいます。日本の産業界に先駆けて1971年にスタートした「郷土の森づくり」。全国各地の製鉄所で、その土地の植生を調べて樹木を選定し、地域の環境に溶けこむ本物の森づくりを進めました。小さな苗は、いまでは見上げるほど大きくなり、キタキツネ、ノスリ、ホタルなど多くの野生動物の姿が見られます。そして、海藻類が減って海が砂漠化する“磯焼け”を改善する「海の森づくり」。製鉄プロセスの副産物である鉄鋼スラグを活かして磯焼けの一因となる鉄分不足を補い、藻場の再生を通じて豊かな生態系の回復に貢献しています。多様な生き物が健やかに育つ環境を、未来へ。新日鉄の活動は、これからも続きます。

先進のその先へ、新日鉄

www.nsc.co.jp

文藝春秋 2010年11・12月号掲載

CONTENTS

新年のご挨拶 強い競争力の実現に、全力で取り組んでまいります 新日本製鉄(株) 代表取締役社長 宗岡 正二	2
新春会長対談 これからも輝きつづける日本であってほしい 作家 水村 美苗氏 新日本製鉄(株) 代表取締役会長 三村 明夫	4
社会とともに地域とともに VOL.36-39	12
「エコプロダクツ2010」に出展/ものづくりの魅力を「たたら炎」で熱く伝える/ 環境・教育分野で地域に根ざした社会貢献活動を展開/ 海外でも次代を担う青少年の育成を支援	12
新日鉄ギャラリー 東京製造所 / 新日鉄の ECO Products マリロイ [®] 鋼管	19
先進のその先へ VOL.20 (株)日鉄エレクトックス「FA 開発センター」 二次電池需要の拡大に対応	20
GROUP CLIP	21

表紙のことは New Morning

林あり、沼あり、蒼天あり、
手つかずの朝に、あたらしいシャツ。

祐成 政徳 (すけなり・まさのり)

作者プロフィール / 1960年福岡県生まれ。武蔵野美術大学油絵学科卒業。93年から一年余ドイツ、ミュンヘン州立芸大に留学(シュタイナー奨学金)。その後もドイツに滞在制作で招かれ97年個展「OPERA」を開催。2003年チェコ「House of Art」にて個展を開催。2006年第六回上海ビエンナーレ参加、2007年エルマンノ・カソリ・プライズ コミュニケーション特別賞受賞。2002年より東京造形大学非常勤教員、現在に至る。

